「やぁ、生きていたんやね」

阪神大震災　先輩4人が激白

1995年１月17日早朝、神戸の街は一瞬にして壊滅状態になりました。忘れもしない阪神淡路大震災。開校2年目のカレッジは救援基地となり、学生たちは率先して支援活動に飛び込みました。村内で、避難所で、自治会で。できる活動を、できる場所でやろうと共助の輪はどんどん広がり〈ボランティアのＫＳＣ〉はスタートを切ったのです。グループ〈わ〉は「震災支援シンポジウム」開催にあたって、卒業生十数人から当時の体験談を伺いました。その体験はその後の人生にどんな影響を与えたのか、後輩に伝えたいことは何か。4人の先輩に胸中を語ってもらいました。（広報・井口久美子）【文中敬称略】

後藤慶子（福祉1期・北）

宮城智子（音文2期・兵庫）

細野恵久（福祉3期・須磨）

飯井冴子（元事務局）

――震災発生時、どんな状況でしたか。

細野　入学して4か月。発生時は布団の中にいましたが、神戸で地震？「まさか」とびっくり仰天。自宅は、屋根瓦がずれた程度で大した被害はありませんでしたが、テレビで都市機能がマヒしていることを知り衝撃を受けました。

宮城　細野さんと入学は一緒です。私の家も大きな被害はなかったので、片付けや修理をしながら、クラスメートの安否確認に走り回りました。入学直後に作成した、住所録と写真は大いに役立ちましたね。

飯井　自宅は補修程度の被害ですみましたが、水道、ガスは1か月間ストップ。カレッジへの交通手段がなく、代替バスやタクシーを乗り継ぎ、3～4時間かけて出勤していました。道で知り合いに出会うと「やあ、生きていたんやね」が挨拶の言葉でした。

後藤　大変でしたね。私は北区在住のため、ほとんど被害はありませんでした。クラスの安否確認は割と早くに行われ、全員無事だったので、安心したことを覚えています。

飯井　カレッジ事務局でも、在校生（1・2期生）の安否確認を最優先しました。幸い学生さんは全員無事でしたが、音文の講師が亡くなられ、強烈なショックを受けました。

村内で、避難所で、施設で活動

――ボランティア活動を始めたきっかけは。

宮城　私は音文なので、コーラスでボランティアをしようと楽器を持ちよって、クラスのみんなで練習に取り組みました。初めての慰問は老人ホームへ…徐々に活動先を広げていきました。

後藤　1月末でしたか。「村の温泉が無料開放になるので、案内・整理など手伝ってくれないか」と呼びかけがあり参加しました。

細野　私は、市内の惨状を知り「何かできることはないか」と区役所へ相談。紹介された避難所で、カレッジの仲間3人と8月半ばの閉鎖まで活動を続けました。

――日々、被災者はどんな様子でしたか。

後藤　温泉には毎日、たくさんの人たちが押しかけ、建物の周りまで長蛇の列でした。雪の降る日は本当にお気の毒でしたが、お風呂上りに赤みのさした顔を見て、一緒にホッとしたものです。

細野　避難者の関心は物資のことから、風呂やトイレなどへ、だんだん変化していきました。この経験を通して、被災者のニーズを的確に汲み取り対応することが、きわめて大切であることを学びました。ボランティア活動を円滑に進めるには、コーディネーター機能が重要ですね。